

第1次5ヶ年計画報告書(資料編)

(自平成15年4月1日 至平成20年3月31日)

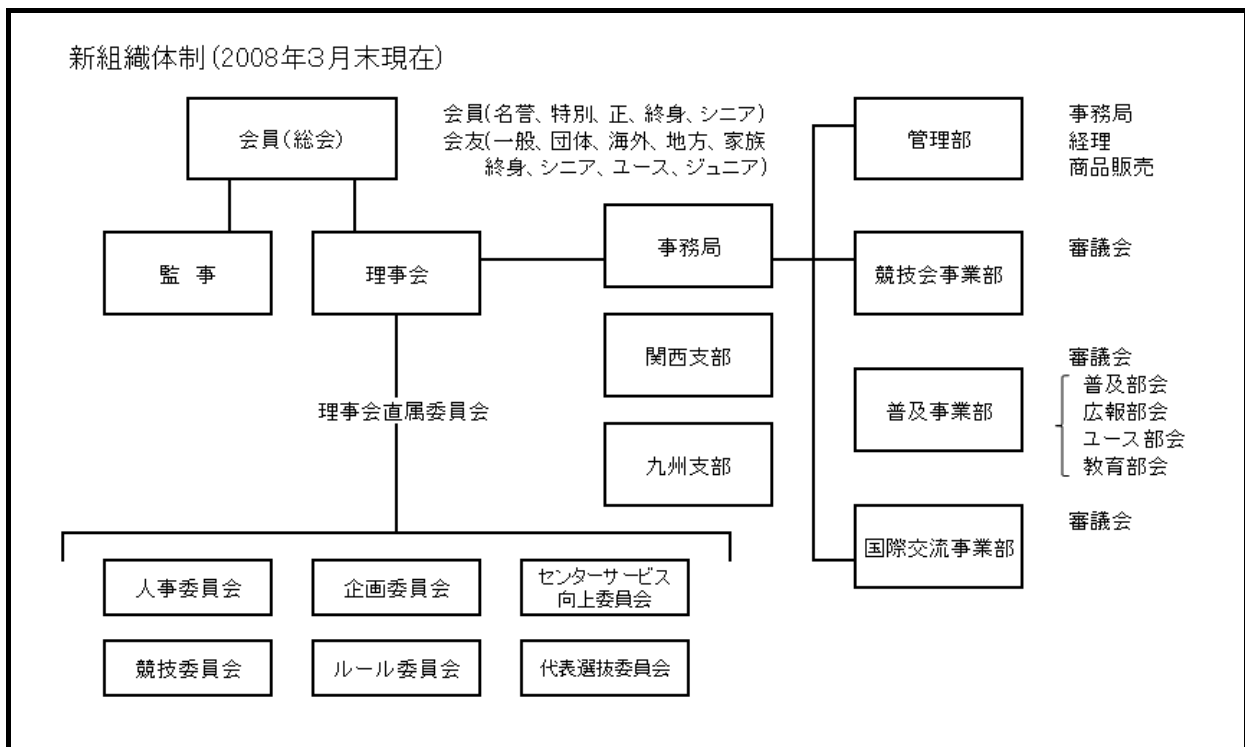
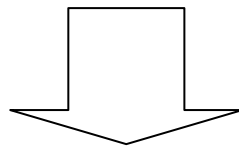
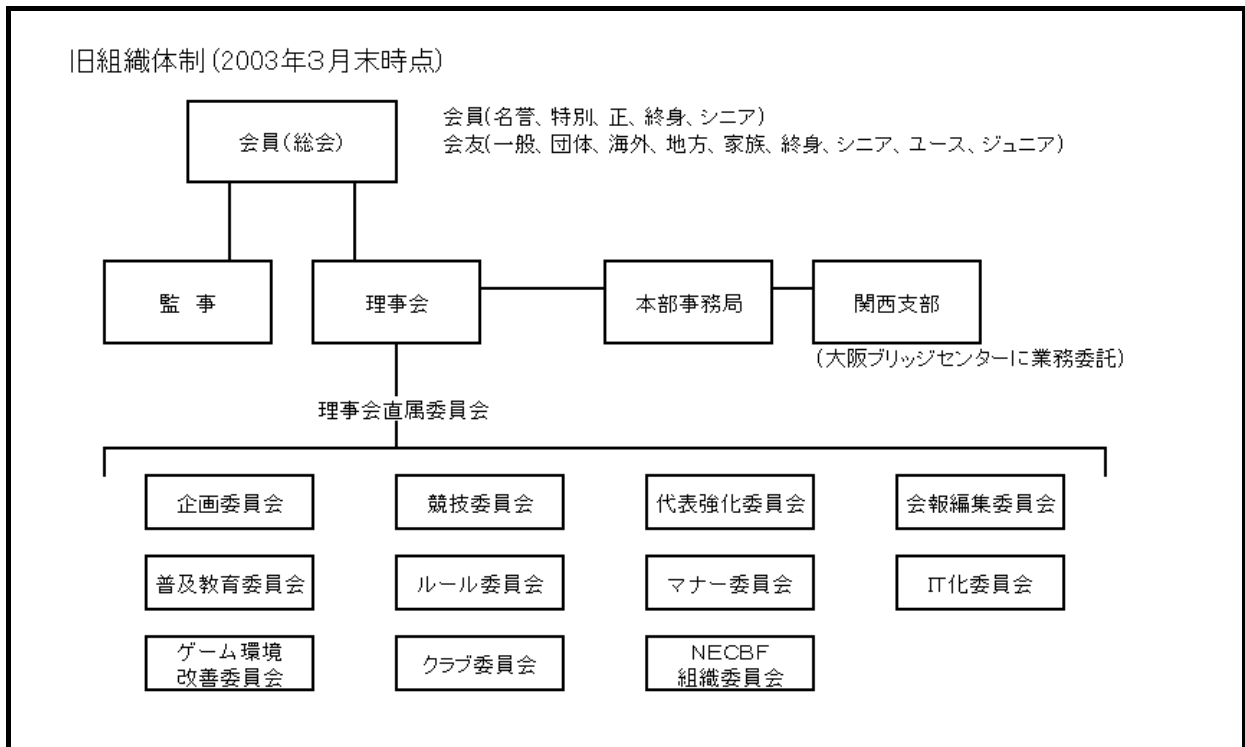
(a) 事業の継続的・安定的運営を推進するための事業基盤(インフラ)の整備

(a) 連盟組織の改編(企画委員会)

(資料1) 組織改編計画関連実施状況

2003年度：	<ul style="list-style-type: none">「組織改編計画」の内容を検討、原案を理事会に提出、承認。連盟事業の外部委託に係わる規定を整備。野田祐子氏を職員として採用。
2004年度：	<ul style="list-style-type: none">「組織改編計画」を会報(2004年5・6月号)に掲載、会員・会友に内容を公示。普及教育委員会改め普及事業部を始動(宮田亮平部長)、事業部内に審議会を設置。懸案の広報活動に力を入れるため、広報部会も設置。理事会直轄の臨時選考委員会が事業部長職について検討、普及事業部長は宮田亮平氏の後任者を公募して高橋陽子氏を採用、競技会事業部長には大政哲人職員を任命。連盟内部各種規定の見直しに着手。
2005年度：	<ul style="list-style-type: none">事業部制が本格始動。4月より高橋陽子普及事業部長、大政哲人競技会事業部長が就任。また宮田亮平氏を連盟顧問として引き続き雇用。競技会事業部内に審議会を設置。山菅昭夫氏を京葉ブリッジセンターマネージャー兼任で臨時職員として採用。新体制に伴う職員の担当業務の再割当と業務内容の確認を実施。中谷事務局長が定年退職を迎えるにあたり、理事会直轄の臨時選考委員会(後に常設の人事委員会に発展解消)が事務局長兼管理部長を公募、吉田正氏を採用(2006年1月着任)。連盟内部各種規定の見直し完了(含む職員給与規定)。
2006年度：	<ul style="list-style-type: none">2006年度より、事務局内で職員の業務実績評価システムと評価内容に連動した新給与体系を導入。7月に人事委員会及び代表選抜委員会が発足。3月に九州支部及び福岡ブリッジプラザを開設。同時に山菅昭夫氏が同ブリッジプラザのマネージャーに就任。3月末に中谷国際交流事業部長が退職、後任は吉田事務局長が兼務。また宮田亮平顧問が退任。
2007年度：	<ul style="list-style-type: none">10月にセンターサービス向上委員会が発足。

(資料2) 組織改編計画による組織図の変化



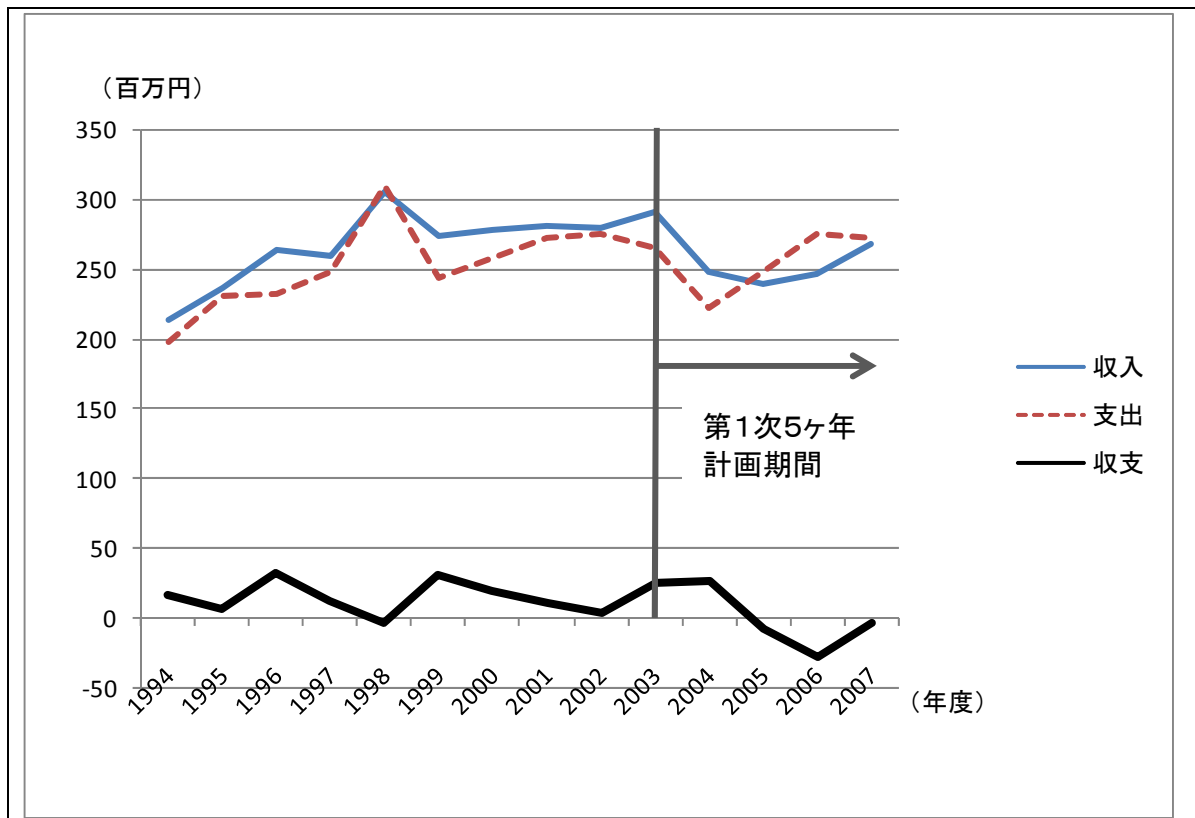
(資料3) 連盟収支の推移(1994~2007年度*)

(単位：百万円)

年度	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
収入	213	236	263	259	305	273	277	281	279	290	248	239	246	268
支出	197	230	231	247	309	243	258	271	275	265	222	247	274	271
収支	16	6	32	12	△4	30	19	10	4	25	26	△8	△28	△3
特記事項					★							★	★	★

(注) ★ 特記事項は次のとおり：

- 1998年 P A B F 神戸大会
- 2005年 普及事業
- 2006年 普及事業拡大、九州支部開設
- 2007年 普及事業、九州支部



(b) 重要強化分野のインフラ整備

i) ブリッジ普及体制の支援強化（普及事業部）

（資料4）普及協力員養成講座（2003～2007年度）

① 開催数と受講者数の推移

年度		開催日	開催地	受講者数(人)	年度別合計(人)
2003	1	2003/5/30	東京都	12	27
	2	2004/03/13	岡山県	10	
	3	2004/03/26	福岡県	5	
2004	1	2004/5/26	千葉県	14	45
	2	2004/09/04	広島県	8	
	3	2005/01/21	東京都	8	
	4	2005/03/23	東京都	15	
2005	1	2005/8/10	神奈川県	18	56
	2	2005/10/31	福井県	13	
	3	2006/01/28	茨城県	12	
	4	2006/03/11	北海道	13	
2006	1	2006/7/14	東京都	8	8
2007	1	2007/4/11	千葉県	4	27
	2	2007/05/19	宮城県	2	
	3	2007/06/14	インドネシア	4	
	4	2007/06/30	北海道	3	
	5	2007/07/12	福岡県	3	
	6	2007/07/26	福岡県	9	
	7	2008/01/16	東京都	2	
合計	19				163

② 地域別開催状況の内訳

	地域	講座開催数(回)	%	受講者数(人)	%
首都圏	東京都	5		45	
	神奈川県	1		18	
	千葉県	2		18	
小計		8	42.1%	81	49.7%
首都圏以外	福岡県	3		17	
	北海道	2		16	
	宮城県	1		2	
	福井県	1		13	
	茨城県	1		12	
	岡山県	1		10	
	広島県	1		8	
	インドネシア	1		4	
	小計		11	57.9%	82
合計		19	100%	163	100%

《検証》

- 「普及協力員養成講座」は、5ヶ年計画期間中に開催19回、受講者数は163人と目標である受講者数200人をやや下回った。
- 開催地分布：首都圏での開催が多いが、北海道から福岡、海外と、範囲は広くカバーしている。首都圏とそれ以外で分けた地域別の開催講座数と受講者数の比率は、首都圏での開催数が全体の約4割強であるのに対し、受講者数では約半分を占めた。ただし、首都圏開催の場合には地方在住の会員・会友が参加している場合もある。

(資料5) 体験教室助成実績

① 主催者別体験教室助成実績(2003～2007年度合計)

		2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	合計
全体	適用件数	46	53	56	79	60	296
	参加者数	724	612	775	975	735	3,821
	助成総額	¥801,255	¥648,657	¥629,900	¥884,900	¥692,020	¥3,656,732

主催者別内訳

個人	適用件数	22	27	37	60	48	194
	参加者数	324 *	414	585	778	575	2,676 *
	助成総額	¥396,812	¥306,547	¥409,100	¥674,900	¥531,820	¥2,319,179
センター ／クラブ	適用件数	24	26	19	19	12	100
	参加者数	400	198	190	197	160	1,145
	助成総額	¥404,443	¥342,110	¥220,800	¥210,000	¥160,200	¥1,337,553

② 地域別体験教室助成実績(2003～2007年度合計)

		合計		
		適用件数(件)	参加者数(人)	助成総額(円)
首都圏	東京都	68	974	¥894,890
	神奈川県	110	1,864	¥1,499,988
	千葉県	65	458	¥691,339
	埼玉県	1	12	¥10,570
小計		244	3,308	¥3,096,787
それ以外	北海道	4	11	¥42,000
	宮城	4	18	¥36,045
	群馬	1	3	¥9,000
	栃木	3	38	¥36,500
	長野	1	7	¥4,800
	静岡	8	159	¥115,000
	福井	10	169	¥124,000
	新潟	1	14	¥14,000
	大阪	1	11	¥6,000
	愛媛	12	41	¥124,220
	福岡	2	22	¥20,500
	沖縄	2	20	¥19,580
	海外	1	*	¥8,300
小計		50	513	¥559,945
合計		294	3,821	¥3,656,732

- (注) 1. 参加者数の*は不明分を含むため、実際にはこれより多い。
 2. 助成申請のなかった体験教室は含まない。講師派遣、教室助成を含む。
 3. 1回の申請で複数開催したものがあがるが、上記申請件数は教室開催数ベース。
 2005年度、2006年度の不成立1件ずつを含む。

<参考> 期間中の連盟主催の体験教室の実績は以下のとおり(国民文化祭・まなびピアを含む)。

	開催回数	合計参加者数
2003年度	※ 2回	※ 1,150人
2004年度	7回	※ 288人
2005年度	16回	1,707人
2006年度	30回	2,624人
2007年度	31回	1,987人
期間合計	※ 86回	※ 7,756人

(注) ※は記録なし分を含むので、実際にはこれより多い。

(資料6) 地域別入門講習会助成実績 (2003~2007年度)

年度	2003			2004			2005			2006			2007			合計		
地域	件数	参加者	助成額	件数	参加者	助成額	件数	参加者	助成額	件数	参加者	助成額	件数	参加者	助成額	申請	参加者	助成額
首都圏																		
東京	4	18	¥311,100	4	74	¥206,440	4	24	¥85,500	2	36	¥124,900	2	11	¥46,200	16	163	¥774,140
神奈川	5	52*	¥303,120	7	62*	¥344,371	5	62	¥205,888	5	70	¥273,200	4	47	¥152,050	26	293*	¥1,278,629
千葉	1	13	¥85,000	3	32	¥320,565	6	72	¥270,800	7	67	¥186,280	4	28	¥110,900	21	212	¥973,545
埼玉	1	4	¥42,280													1	4	¥42,280
小計	11	87	¥741,500	14	168*	¥871,376	15	158	¥562,188	14	173	¥584,380	10	86	¥309,150	64	672*	¥3,068,594
それ以外																		
北海道													3	16	¥70,950	3	16	¥70,950
宮城				1	3	¥14,000	1	4	¥17,000	2	18	¥43,750	1	16	¥24,500	5	41	¥99,250
栃木													1	39	¥78,000	1	39	¥78,000
富山							1	4	¥22,000							1	4	¥22,000
福井							1	12	¥30,500	1	14	¥29,000	1	9	¥15,500	3	35	¥75,000
愛媛	1	8	¥57,480	1	6	¥48,150				1			1	3	¥20,250	4	17	¥125,880
その他	1	0*	¥91,280	1	50	¥131,000				1	43	¥79,500	1	10	¥26,967	4	103*	¥328,747
小計	2	8*	¥148,760	3	59	¥193,150	3	20	¥69,500	4	75	¥152,250	8	93	¥236,167	20	255*	¥799,827
合計	13	95*	¥890,260	17	227 *	¥1,064,526	18	178	¥631,688	18	248	¥736,630	18	179	¥545,317	84	927*	¥3,868,421

- (注) 1. 個人、ブリッジセンター/クラブ主催の合計。
 2. 件数は申請ベース。1件で複数回分をまとめて申請している場合があるので、件数=講習会件数ではない。
 3. 参加者の * は不明分を含む。

(資料7) カルチャーセンター：アシスタント助成実績 * 2005 年度より開始

年度	延べ校数	助成回数	延べ受講者数	助成額	助成地域別内訳
2005 年度	7 校	14 回	152 人	¥339,000	1) 千葉：4 校/10 回/105 人 2) 愛媛：1 校/2 回/17 人 3) 東京：1 校/1 回/25 人 4) 香川：1 校/1 回/11 人
2006 年度	14 校	29 回	238 人	¥648,000	1) 千葉：5 校/16 回/122 人 2) 東京：4 校/6 回/55 人 3) 北海道：1 校/2 回/21 人 4) 茨城：1 校/2 回/14 人 5) 愛媛：1 校/1 回/3 人 6) 埼玉：1 校/1 回/5 人 7) 富山：1 校/1 回/18 人
2007 年度	12 校	26 回	213 人	¥687,000	1) 千葉：3 校/8 回/72 人 2) 東京：5 校/11 回/102 人 3) 北海道：2 校/4 回/20 人 4) 埼玉：1 校/3 回/19 人
合 計	32 校	63 回	603 人	¥1,674,000	助成を行った都道府県数：8

<補足> 首都圏 VS それ以外の比率

地域	受講者数	助成額	助成件数	延べ校数
首都圏合計	83%	74%	81%	75%
それ以外合計	17%	26%	19%	25%
合 計	100%	100%	100%	100%

《検証：*3年間》

- カルチャーセンターのアシスタントに対する助成は3年間で延べ32校、助成回数は63回、延べ受講者数603人。総額約170万円を助成した。
- 助成対象となったカルチャーセンター所在地は、千葉・東京・北海道・愛媛・香川・埼玉・茨城・富山の8都道府県。
- 全般的に首都圏(東京・千葉・埼玉)が多く、前期間中の合計で、助成額と述べ校数では全体の約75%、助成回数と述べ受講者数ではそれぞれ約80%を占めた。
- アシスタント助成の申請が寄せられるのは、次のような場合が多い。
 - 受講者数が少なく、受講者数が半端な場合
 - 1クラス受講者が多すぎて講師1人では手が回らない場合
 - カルチャーセンター側の都合により、新規入門者と継続者を同時に指導しなければならない場合

(資料8)「ブリッジ普及に係わるブリッジセンター報奨規定」適用状況(2002～2006年度)

	2002年度	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	計
四谷BC	440,000	260,000	260,000	390,000	640,000	1,990,000
東中野BC	60,000	80,000	40,000	0	0	180,000
吉祥寺BC				230,000	170,000	400,000
横浜BC	330,000	370,000	210,000	130,000	200,000	1,240,000
大船BC		330,000	90,000	120,000	120,000	660,000
京葉BC			90,000	70,000	170,000	330,000
計	830,000	1,040,000	690,000	940,000	1,300,000	4,800,000

- (注) 1. 本規定は、ブリッジセンターにおいて公認クラブ規則第30条2項「公認BCの義務」として規定されるブリッジの普及活動に力を入れてもらうためのインセンティブとして「ブリッジセンターが主催する入門講習会を初めて受講し6ヵ月以上継続した受講生数(最低20回出席)」を基準に評価、これに対して報奨金設けたもの。2002年度から2006年度にかけて期間限定で実施。
2. 報奨金額の算出ベースは次の通り。
 報奨金額 = (A - B) x 1万円
 A : 入門講習会を受講し始めて6ヶ月以上継続した人数
 B : 0名 (センター設立5年未満の場合)
 15名 (センター設立後5年以上経過している場合)
3. 灰色部分はセンター設立5年以上が経過しているBCを示す(B=15)。
4. 五反田ブリッジスタジオ、六本木DBC、高田馬場BC、大塚BC、名古屋BC及び大阪BCからは申請無し。

《検証》

ブリッジセンターにおける入門講習会の開催を側面から支援することを目的に5年間の期限付きで当規定を設けたが、公認クラブ規則第30条2項に規定されている「ブリッジセンターの義務＝普及活動の実施」について改めて再認識を促したという意味を含め、一定の成果を得ることができた。首都圏におけるフラッグショップ的な存在である四谷ブリッジセンターと横浜ブリッジセンターでは、精力的に講習会を開催している実態が本規定の適用状況から顕著に見てとれる点は特筆事項である。

ii) 競技会運営体制の強化(競技会事業部)

(資料9) ディレクター講習会：開催数と受講者数の推移

	(2002年度)	2003年度	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度	5ヶ年計画期間中合計
ディレクター講習会開催数	2回	3回	6回	5回	5回	4回	23回
入門講習会受講者数	107人	119人	31人	18人	15人	1人	189人
地方開催入門講習会受講者数		42人	19人		16人	14人	91人
クラブディレクター向け講習会受講者数			120人	38人	14人	9人	181人
セクショナルディレクター志望者向け講習会受講者数				24人	10人	15人	49人
合計		161人	170人	80人	55人	44人	510人

(資料10) クラブディレクター資格新規取得者の推移(暦年ベース)

	(2002年)	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
クラブディレクター資格新規取得者数	(47人)	20人	22人	33人	20人	21人

(注) 本資料のみ暦年ベース。

(資料11) ディレクター養成とレベル向上のための追加事業

<p>1) クラブディレクター講習会受講者向け実習</p> <p>四谷、横浜及び京葉ブリッジセンターで教育担当者が講習会受講者を実地に教育する「実習」の場を設け、希望者はブリッジセンターに事前に申し込めば実習できるようにした。</p>
<p>2) セクショナルディレクター講習会受講者向け実習</p> <p>四谷ブリッジセンター主催のセクショナルで教育担当者が講習会受講者を実地に教育する「実習」の場を設けた。</p> <p>※セクショナルディレクターの中から能力と意欲あるディレクターを連盟主催ナショナル競技会のアシスタントとして登用・研修して、ナショナルディレクター養成を開始した。</p>
<p>3) ディレクターマニュアル改訂</p> <p>ディレクターマニュアルの改訂作業を行い、JCB Lホームページに公開した。</p>
<p>4) 公認ディレクター規則の改正</p> <p>公認ディレクター規則の改正作業を行い、2004年5月に施行した。</p>
<p>5) ブリッジの規則改正に伴う対ディレクター啓蒙活動</p> <p>2008年4月26日(土)施行された規則改定に向けて、同年4月上旬から中旬にかけてに新規則に関する講習会を開催し、規則変更点の周知徹底を図った。</p>
<p>6) 自己採点式ディレクタースキルのチェックリストの導入</p> <p>ディレクターに求められる能力を自己採点方式で確認しつつ、能力向上に役立てることのできるチェックリストを2008年度に試験的に導入する方向で現在検討中。</p>

iii) 広報活動の組織化・強化(普及事業部広報部会)

(資料12) JCB Lメディア全般の見直しと改善

1) ウェブサイトの全面改定

従来の連盟ウェブサイトは内容・使い勝手・デザインなどの観点から改善余地が大きかったことから、2005年に全面的に改定した。

2005年4月、事務局内にリニューアルチームを編成、会員・会友に対して充実した内容の情報を迅速に提供するとともに、ブリッジを知らない一般の人々に対しては「わかりやすくブリッジの魅力を伝える」「ブリッジに対して良いイメージを持ってもらう」ことを目標に掲げて約3ヶ月にわたる集中作業を実施、同年8月に新サイトをアップロードした。

新ウェブサイトではサイト訪問の目的別にカテゴリーを分類、閲覧者が必要な情報に容易にたどり着ける構成にするとともに、高齢者やジュニアでも見易くかつ洗練されたデザインを採用した。会員・会友向けの開示情報、ユース&ジュニアページなどこれまでなかったページを多数新設して、コンテンツ量は旧ウェブサイトの10倍以上に増えた。

新サイトはデザイン・内容ともに好評で社会的信用度の向上につながった。また、ウェブサイト経由でカルチャースクールからの講座開講依頼や企業からのスポンサー申し出などが全国からJCB Lに直接寄せられるなど、普及面での貢献度も大きい。

現在は月次と速報掲出時の臨時更新との2本立てで更新しており、原稿作成・編集作業は普及事業部の定例主要業務のひとつとなった。会員・会友向けの「MP&SP検索」ページ(2006年4月)、新たにブリッジに関心を持ってアクセスしてきた人向けの「ビギナーの声」ページ(2006年10月)を新設したり、ジュニア向けイベントの増加に伴いジュニアページを独立させたり(2006年7月)など、常に閲覧者の立場に立って充実化を継続中である。

2) 印刷媒体の見直し

<総合パンフレットの製作>

2005年度に既存の小パンフレット類の見直しを行い、その結果、普及広報活動に不可欠なブリッジ及びJCB Lの社会的信用度や知名度を高めることに役立つ印刷物資料がないことから、優良企業の会社案内のような高いクオリティを持つブリッジ及びJCB Lの総合パンフレットの製作を決定、2006年6月に予定通り完成した。

普及・広報活動の対象者のみならず普及に携わる会員・会友にも好評で、ブリッジを総合的にわかりやすく紹介するにあたって有効なツールとして広く活用されている。

<初心者向けパンフレットの製作>

2006年度に再度パンフレット類の見直しを実施した結果、既存パンフレットのうち「ブリッジのお話」「Let's Play Bridge」、「ミニブリッジ」の3種類は初版発行からの経過年数が多いうえ互いに内容が重複していること及び経費削減の観点から、これらのパンフレットを統廃合する形でパンフレットの新規作成を決定した。

新パンフレットではブリッジを全く知らない潜在プレイヤー向けに「小学生が読んででも遊びたくなる」を目標におき2007年度後半より作業を開始、2008年度早々に完成した。ページ数が大幅増となったにもかかわらず1冊当たりの印刷コストは約85円で、従来の小パンフレットより価格を大幅に抑えることができた。

(資料12 続き) JCB Lメディア全般の見直しと改善

<会報記事の充実とコスト削減>

初心者から上級者まで広く会員・会友に親しまれる会報作りを目指して従来から内容の見直しと改善を随時行ってきた。5ヶ年計画期間中は、想定読者別に情報コーナーを分けたり、新連載を開始したりするなど、引き続き会報の内容の見直しと充実化を図るとともに、競技会結果欄の文字サイズを縮小するなどしてコスト削減努力を継続した。

第1次5ヶ年計画期間中の主な取り組みは以下のとおり。

・2003年

「創立50周年記念コーナー」として特集記事を1年間にわたり掲載。

主な内容は：『私とJCB L』（創設期会員の投稿）、『BULLETIN プレイバック』（初期会報記事紹介）、現・元会長からのご挨拶、草創期会員を招いての座談会など。

「格言で覚えるオークションの判断」（初中級向け＝ビッドのアドバイス）の連載開始。

・2004年

50周年のまとめとしてHANDBOOKにJCB L50周年史を掲載。

5・6月号：「マイクのアドバイス」（中上級向け：ACBL会報のM・ロレンスの記事を翻訳）連載開始（2007年5・6月号で終了）

9・10月号：「コントラクトキラーズ」（プレイヤー全般向け：海外読み物の翻訳）連載開始（2007年3・4月号で終了）

11・12月号：「論説」再開（役員持ち回り－2008年3・4月号で一巡、一旦休止）

・2005年

5・6月号：「橋之介のブリッジれぽーと」（初心者・ジュニア向け）の連載開始

・2006年度

1・2月号：「プレイ・プロブレム」再開（初中級向け：執筆者交代）

5・6月号：「KQJのためのQ&Aコーナー」（初中級向け質問コーナー）の連載開始（不定期）

11・12月号：「World Bridge Update」（中上級者/プレイヤー全般向け；B・シニア書き下ろし記事の翻訳）の連載開始

・2007年

1・2月号：普及事業部からの活動レポートの定期的な掲載開始

5・6月号：「ジュニアコーナー」（会員向け＝ジュニア活動紹介、ジュニア向け＝イベント開催情報）新設

9・10月号：「エキスパートのプレイライン」（中上級向け＝T・リースの著作翻訳）連載開始

・2007年度：印刷費用値下げ交渉の結果、次年度より約1700万円の経費が削減できる見通し。

<要覧>

要覧は2006年の総合パンフレットの製作に伴いその必要性が低下したため廃刊という意見も出たが、当面は継続することとした。ただし、必要部数が100部程度であるため外注せず事務局内で作成することとし、経費削減につなげている。また、個人情報保護の観点から2005年度版より会員名簿ページの住所・勤務先・電話番号の削除にふみきった。

(資料13) 5ヶ年計画期間中に製作した主な広報・普及ツール

2003年度：	<ul style="list-style-type: none"> 「ブリッジ入門ソフト(Learn to Play Bridge)1」日本語版 5月にJCBLウェブサイトアップ、2007年3月末時点ダウンロード数累計30,579回
2004年度：	<ul style="list-style-type: none"> 「ブリッジ入門ソフト(Learn to Play Bridge)2」日本語版 10月にJCBLウェブサイトアップ、2007年3月末時点ダウンロード数累計15,579回 JCBLイメージキャラクター「橋之介」(オリジナルぬいぐるみ)の採用/製作 「橋之介」グッズ - カード(黒/茶)、ポスター、パネル、シール、ピンバッジ イベント用展示物 - 大型パネル・ネオンサイン・フラッシュビデオ
2005年度：	<ul style="list-style-type: none"> JCBLウェブサイトの刷新 「橋之介」グッズ - 風船(白/赤/青の3色)、携帯ストラップ、クリアホルダー(白/ピンク)、ピンバッジ(追加) プロモーションビデオ(2002年度製作)増版(50巻) 配布用PR資料ファイル(これまでの主要記事、リリースなどをまとめたもの;手作り)
2006年度：	<ul style="list-style-type: none"> JCBL総合パンフレット(メディア・官公庁・教育現場・企業団体向け) ブリッジのイメージポスター(総合パンフレットに使用したイメージ写真を転用) イベント用展示物 - のぼり(大)x2基、簡易パネル(約20種;手作り) ブリッジの総合プレスリリース(主要メディア230社へ一斉発送。一部は持参してPR) ブリッジPR年賀状(メディア・他関係者向け計400枚) 配布用PR資料ファイル(PRプレスリリース同上) 配布用日刊スポーツ全面記事広告「コントラクトブリッジで世界にチャレンジ+福岡ブリッジプラザ2007年3月オープン告知」3000部別刷り IMSAPANEL(国際マインドスポーツ協会加盟4国際組織の紹介パネル)
2007年度：	<ul style="list-style-type: none"> PR映像収録DVD(これまでにTV放映された主要なブリッジ関連報道を編集したもの)100枚 既存小パンフレット増刷(「ミニブリッジ」・「ブリッジのお話」各5000部) 展示用パネル6枚 テーマ: ①ブリッジと教育、②ブリッジとは?、③ブリッジの歴史、④ブリッジの基本、⑤世界におけるブリッジ、⑥JCBL 「橋之介」グッズ - 風船(在庫減のため、オレンジ/薄緑/黄色の3色を追加) 年賀状(テーマ: ワールドマインドスポーツゲームズ開催決定PR)400枚 配布用PR資料ファイル(同上)
2008年度(予定)：	<ul style="list-style-type: none"> 初心者向けパンフレット(既存パンフレット3種類を統廃合して刷新) 年賀状(ワールドマインドスポーツゲームズ参加をPR) 配布用PR資料ファイル(同上)

(資料14) マスメディアに対する広報活動の強化

〈概要〉

従来手薄だったマスメディア対策を強化するため、活字・放送を問わずあらゆるメディアに対して積極的に広報活動を展開した。メディア関係者に関心を持ってもらうため直接コンタクトを重視し、PR訪問、電話・メールでの接触・取材依頼、プレスリリースの配布、ウェブサイトへの掲出、メディア向け特別体験教室（メディアナイト）の開催など、様々な形での直接的なアプローチを試みた。さらに、広告効果を高めるため、地方でのリジョナル競技会やまなびピア・国民文化祭などのイベント開催時には、これと連動させる形で開催地域において重点的にPR活動を行った。

この結果、マスメディアへの露出は大幅に増加、特に2006年度以降は全国紙のウェブ版でブリッジが取り上げられるケースが増え始めている。また、体験教室や講習会への参加者の増加や休眠していた往年のプレイヤーの復活といった形で集客効果が高まるとともに、ブリッジの社会的認知度向上にもつながり始めている模様である。

〈メディア露出件数〉

	全国紙	地方紙	その他	放送メディア	計
2003年度	*記録なし	2回	1回	5回	8回～ *記録存在分のみ
発行部数	N/A	411,000部	148,000部		559,000部
2004年度	4回	*記録なし	2回	5回	7回～*記録存在分のみ
発行部数	23,999,000部	N/A	N/A		23,999,000部～
2005年度	16回	15回	2回	5回	38回
発行部数	85,765,000部	6,308,000部	150,000部		92,223,000部
2006年度	15回	38回	15回	10回	74回
発行部数	69,171,000部	14,250,000部	6,577,000部		89,999,000部～
2007年度	21回	36回	11回	8回	76回
発行部数	78,796,000部	13,729,000部～	1,129,000部～		93,654,000部～
期間中合計	56回	90回	31回	33回	210回
	257,731,000部	34,699,000部	8,003,000部		300,433,000部

(資料14 続き) マスメディアに対する広報活動の強化

〈主なブリッジ関連メディア報道〉

5ヶ年計画期間中の主なブリッジ関連のメディア報道は次のとおり。

記事：	2004年	5月	➤ 朝日新聞朝刊「頭脳スポーツでも五輪を」
	2005年	4月～7月	➤ 朝日新聞／毎日新聞－ダミアニ会長来日・IMS A設立・共同記者会見・頭脳五輪関連記事「知の五輪 狙え北京を」など(計9回)
		10月	➤ 中国新聞「中高年にブリッジ熱」
		11月	➤ 読売新聞「教育現場に“カードゲーム”」(慶應義塾普通部授業)
			➤ 神奈川新聞「頭脳と心を鍛え」(慶應義塾普通部授業)
	2006年	3月	➤ 千葉日報「トランプで頭脳体操」
		6月	➤ 日本経済新聞「頭脳スポーツ定着なるか」
		9月	➤ 西日本新聞「あす福岡に九州支部」
		11月	➤ 朝日新聞「チェス・囲碁…頭脳五輪 北京で来年」
	2007年	1月	➤ 日本経済新聞夕刊「知的に駆け引き コントラクトブリッジ人気 ペア組みプレイ シニア層も熱中」
		2月	➤ 西日本新聞「九州の拠点オープン」
			➤ 朝日新聞インターネット版エンターテインメントサイト「どらく」の「大人のお稽古」ページ[3回シリーズ]
		5月	➤ 河北新報夕刊「知的ゲームで世界へ」
		6月	➤ 日経WagaMaga「趣」「知的駆け引きの醍醐味 ブリッジを覚える」
		8月	➤ 日刊工業新聞社「ブリッジで頭の運動-ゲラー教授、東大で授業」
		10月	➤ 北海道新聞「頭脳五輪 初開催へ 北京で来年10月」
		11月	➤ 徳島新聞「コントラクトブリッジの世界 上・下」
			➤ 朝日新聞Be やって未体験「記憶と推理のダブルス戦 コントラクトブリッジ」
	2008年	1月	➤ インターナショナルヘラルドトリビューン朝日 「Bridging Many Cultures」
			➤ 朝日新聞 青鉛筆「東大ブリッジ実戦授業」
		2月	➤ 科学新聞「ブリッジに注目 教育ツール 授業採用例も 記憶力もとに他者の視点推測」
			➤ 産経新聞「脳トレ感覚 大人のトランプ」

(資料14 続き) マスメディアに対する広報活動の強化

TV放映:	2004年	1月	➤ NHK高松 高松BC紹介(ラナデ氏出演)瀬戸内海BF告知
		2月	➤ 神奈川テレビ(NECBF体験教室)
			➤ フジテレビ「あしたまにあーな」(NECBF)
	2005年	6月	➤ フジテレビ(東京)「とくダネ!」(細田博之氏特集)
		8月	➤ 福井放送(地元プレイヤーの活動紹介)
		10月	➤ RCC中国放送「ニュース」(広島リジョナル)
	2006年		➤ 広島テレビ「ニュース」(広島リジョナル)
		3月	➤ 瀬戸内海放送「ニュース」(瀬戸内海ブリッジフェスタ)
		6月	➤ 北海道テレビ「ニュース」(北海道リジョナル)
			➤ 札幌テレビ「ニュース」(北海道リジョナル)
		7月	➤ NHK茨城県域デジタル放送「いばらきワイワイスタジオ」(まなびピア体験教室案内ー生放送で約5分ブリッジ紹介)
			➤ 山口テレビ朝日「ぷち・やまぐち国文祭」(情報番組。約5分間ブリッジシーン・国民文化祭体験教室案内)
		10月	➤ RKB毎日放送(福岡)「ニュースの森」(「脳に良い」をテーマに6分間。福岡ブリッジプラザも紹介)
	2007年	12月	➤ テレビ西日本(福岡)深夜番組「びいーす」(「今年流行るもの」をテーマに。ブリッジ講習シーン放映)
1月		➤ NHK総合テレビ(関東地方)「こんにちはいっと6けん」(「中高年に人気」をテーマに。約12分特集)	
3月		➤ テレビ九州「TXNニュース」(九州リジョナル)	
		➤ テレビ西日本「スーパーニュース」(九州リジョナル)	
4月		➤ 瀬戸内海放送「ニュース」(瀬戸内海ブリッジフェスタ)	
6月		➤ 福岡放送「めんたいワイド」(ワイドショーでブリッジゲーム全般を紹介。約7分)	
8月		➤ 北海道放送「ニュース」(北海道リジョナル)	
11月		➤ 茨城テレビ つくばブリッジクラブ紹介	
2008年	2月	➤ 長崎国際テレビ「ニュース リアルタイム ～ブリッジで広がる人の輪～」(長崎ブリッジ界紹介、約8分)	
ラジオ放送:	2004年	2月	➤ FM高松 瀬戸内海ブリッジフェスタの案内
		2007年	3月
		5月	➤ 西日本放送 「林田スマのハッピートーク」30分番組でブリッジ・福岡ブリッジプラザの紹介
	10月	➤ 四国放送「ちょっとパジャマは早すぎる」徳島と関東のプレイヤーがブリッジを対談形式で30分紹介	
		11月	➤ 四国放送「サタデーモーニング」上記と同様の対談形式でブリッジと国文祭体験教室を紹介(30分)
			➤ 四国放送「サタデーモーニング」国文祭ブリッジ体験教室参加の呼びかけ

(資料14 続き) マスメディアに対する広報活動の強化

〈脳プロジェクト〉

「高齢者におけるカードゲームと記憶の関係：再認・再生課題による検討」

「ブリッジは人間の脳の働きにとってプラス効果がある」という経験的な通説に学術的な裏付けを得て広報活動に活用する目的で、ブリッジと記憶力との相関関係を研究調査する「脳プロジェクト」を立ち上げた。

東京女子医科大学に調査研究を依頼。65歳以上のプレイヤーと非プレイヤー及び20歳前後の青年計150人の協力を得てデータ収集作業を終了、期待通りの分析結果を得て、現在研究論文としてまとめている。2008年9月、学会で正式発表後に研究結果を広く広報してブリッジの社会的認知度向上につなげるとともに、シニア層への普及活動にも活用していく。

〈マインドスポーツ広報〉

2005年4月の国際マインドスポーツ協会（IMS A）設立、WBFダミアニ会長来日時の囲碁・チェスとの共同記者会見、JOC、及び文部科学大臣への表敬訪問といった一連の活動は、「趣味・娯楽」の分野にとどまっていたブリッジを「マインドスポーツ」としてのブリッジ、「教育」に寄与するブリッジへと社会の認識を変える大きなステップとなった。以後、国際囲碁連盟をはじめ、日本棋院、関西棋院、日本ペア碁協会など国内の各囲碁組織や日本チェス協会との交流がさまざまな形で行なわれるようになり、囲碁・チェス関連の報道に同じ「マインドスポーツ」のくくりとして「ブリッジ」の名が登場する機会が飛躍的に増えている。開催が正式決定した「2008年北京ワールドマインドスポーツゲームズ（WMSG）」ーこれまで「頭脳五輪・インテリンピアード」と呼ばれていた一に向けて、参加各競技組織が合同で「チームジャパン」を立ち上げることが決定。これにより今後各組織が連携・協力してマインドスポーツ全般の社会的認知度向上、ひいてはそれぞれの種目の普及と発展をはかる基盤が整った。

「マインドスポーツ広報」および「脳プロジェクト」を、ブリッジの知名度を上げ、ブリッジ人口増加をはかるための普及・広報の2本の柱と位置付ける。

(資料15) 広報関連経費(2003～2007年度)

① 広報・普及関連ツール製作費(手作りの製作物は除く)

年度	項目	費用
2003年度	1) ブリッジ入門ソフト(Learn to Play Bridge) 1(当該年度分製作費) 2) ブリッジ入門ソフト(Learn to Play Bridge) 2(当該年度分製作費) 3) 新人募集タペストリー製作費 4) プロモーションビデオのミニDVD化費用 5) 1000円札ポスター製作費 6) イベントパネル用スチール撮影費 7) ポスター印刷費(2枚)	¥100,000 ¥250,000 ¥80,000 ¥10,000 ¥20,000 ¥470,000 ¥40,000
小計	(注:ブリッジ入門ソフト1の総製作費:¥400,000 支払い終了)	¥970,000
2004年度	1) ブリッジ入門ソフト(Learn to Play Bridge) 2(当該年度分製作費) 2) JCB Lイメージキャラクター「橋之介」キャラクター設定料/製作費 3) 「橋之介」撮影費 4) 「橋之介」カード(黒・茶、計6000組) 5) イベント用フラッシュビデオ 6) 「橋之介」ピンバッジ 7) イベント用 大型パネル 8) イベント用 ネオンサイン	¥450,000 ¥340,000 ¥90,000 ¥1,285,000 ¥1,273,000 ¥176,000 ¥130,000 ¥198,000
小計	(注:ブリッジ入門ソフト2の総製作費:¥700,000 支払い終了)	¥3,942,000
2005年度	1) JCB Lウェブサイトのリニューアル(一式) 2) 「橋之介」風船(赤・白・青 計1500個)一式(棒、ブローワー含む) 3) 「橋之介」カード追加製作(黒、ボルドー 1万組) 4) 「橋之介」マスコット(携帯ストラップ)(3000個) 5) 「橋之介」クリアホルダー 6) 「橋之介」ピンバッジ(2000個追加) 7) プロモーションビデオ追加(50巻) 8) 小パンフレット「ミニブリッジ」増刷(10,000部) 9) 小パンフレット「Let's Play Bridge」増刷(5000部) 10) 「入会案内」印刷費 11) 総合パンフレット用写真 スタジオ撮影費 12) NECBF撮影費 13) 手作りPRパネル(12枚)(記事・リリースなどの貼り込み)パネル代	¥1,769,000 ¥147,000 *商品部扱い *商品部扱い *商品部扱い ¥249,000 ¥120,000 ¥844,000 ¥520,000 ¥143,000 ¥1080,000 ¥70,000 ¥15,000
小計		¥4,957,000
2006年度	1) JCB L総合パンフレット(2000部) 製作費・印刷費 2) ブリッジ・イメージポスター(200部) 製作費・印刷費 3) ブリッジ総合プレスリリース(230部配布) 4) イベント用「のぼり」 5) IMSAパネル 6) プロモーションビデオ増版(50巻) 7) 北海道日刊スポーツ全面記事広告「ブリッジで世界に飛び出せ」別刷り(5000部) 7) 西部日刊スポーツ全面記事広告「コントラクトブリッジで世界に挑戦!」別刷り(5000部) 8) 西日本新聞全面記事広告「どこでも誰とでも楽しめるマインドスポーツ」別刷り(5000部) 9) マインドスポーツTシャツ製作←学生の文化祭用	¥1670,000 ¥160,000 ¥1,180,000 ¥15,000 ¥19,000 ¥120,000 ¥70,000 ¥45,000 ¥49,000 ¥97,000
小計		¥3,425,000
2007年度	1) 朝日新聞全面記事広告「コントラクトブリッジのススメ」(3000部 別刷り) 2) 既存小パンフレット増刷(「ミニブリッジ」「ブリッジのお話」各1万部) 3) PR用映像収録DVDコピー製作(100枚) 4) 展示用ブリッジ紹介パネル(7枚)製作/印刷 5) 「橋之介」風船(オレンジ・黄色・薄緑 各500個) 6) 年賀状(ワールドマインドスポーツゲーム開催決定PR用 400枚)製作/印刷	¥36,000 ¥1,390,000 ¥114,000 ¥200,000 ¥55,000 ¥45,000
小計		¥1,840,000
期間中合計		¥15,134,000

(資料15 続き) 広報関連経費(2003~2007年度)

② 新聞・情報誌・その他 広告費

年度	地域	媒体	備考	件数	費用
2004年度	愛媛	愛媛新聞	まなびピア	2件	¥402,000
	九州	西日本新聞	国民文化祭	2件	¥360,000
	香川	四国新聞	瀬戸内海ブリッジフェスタ	1件	¥238,000
小計				5件	¥1,000,000
2005年度	香川	四国新聞オアシス	講習会/瀬戸内海BF体験教室	2件	¥166,000
	茨城	茨城新聞	カルチャーセンター	1件	¥25,000
	福井	福井新聞おとな日	国民文化祭(5回シリーズ)	5件	¥750,000
	広島	広島リビング	中国新聞杯体験教室	1件	¥65,000
	横浜	ばど首都圏版	NECBF体験教室	1件	¥30,000
	九州	アヴァンティ	体験教室/講習会	1件	¥90,000
小計				11件	¥1,126,000
2006年度	全国	中高年雇用福祉協会年鑑、コンサートパンフレット	ブリッジ全般PR・中高年対象	2件	¥370,000
	北海道	北海道日刊スポーツ	ブリッジ全般・アウクルPR	1件	¥450,000
	茨城	茨城新聞	まなびピア(5回シリーズ)	5件	¥700,000
	神奈川	L&Lインフォメーション、沿線リビング	NECBF体験教室	2件	¥150,000
	広島	リビング広島	広島ブリッジフェスタ	1件	¥90,000
	山口	山口新聞本紙・関連2紙誌	国民文化祭	3件	¥400,000
	九州/山口	西部日刊スポーツ	国民文化祭/福岡ブリッジプラザ開設告知	1件	¥525,000
	九州	西日本新聞、朝日新聞その他	福岡ブリッジプラザ開設・体験教室	10件	¥2,840,000
小計				25件	¥5,525,000
2007年度	全国	中高年雇用福祉協会年鑑、コンサートパンフレット	ブリッジ全般PR・中高年対象	2件	¥370,000
	香川	四国新聞オアシス	瀬戸内海BF体験教室	1件	¥83,000
	徳島	徳島新聞本紙・関連2紙誌	国民文化祭	3件	¥450,000
	北海道	北海道新聞本紙・関連3紙誌	北海道リジョナル体験教室	4件	¥520,000
	広島	中国新聞Cue、リビング広島	中国新聞杯体験教室	2件	¥155,000
	神奈川	沿線リビング・リビング横浜	NECBF体験教室	2件	¥150,000
	静岡	中日ショッパー、リビング	浜松リジョナル体験教室	2件	¥150,000
	宮城	河北新報ウィークリー	リジョナル体験教室	2件	¥205,000
	九州	朝日新聞、読売新聞、西日本新聞、ケイとマブ、その他	福岡ブリッジプラザ開設PR・体験教室	10件	¥1,207,000
小計				28件	¥3,290,000
合計				69件	¥10,941,000

(注) 広告費用がゼロのものは含まないため、件数の合計=掲載実績ではない。

iv) ブリッジ愛好家へのサービス強化(普及事業部)

(資料16) 会員・会友向けキャンペーン(情報サービス以外のサービス活動)

1) JCB Lマスコット：テディベア名称募集キャンペーン

募集期間：2004年11月～2004年12月31日(会報2004年11・12月号掲載)

賞品：①テディベアカード(100人)、②50周年記念カード(当選者全員)、
③2005年P A B F ソウル大会へペアで招待(当選者の中から抽選で5人)

2) 新入会友紹介キャンペーン

実施期間：

- ①・2005年3月1日～6月30日(2005年度キャンペーン)
- ②・2006年1月1日～4月30日(2006年度キャンペーン)
- ③・2007年1月～4月30日(2007年度キャンペーン)
- ④・2008年1月～4月30日(2008年度キャンペーン)

特典：

- ① 紹介者 → 新入会友1人につきQUOカード千円分1枚(上限1万円)
新入会友 → スコアブック
- ② /③ 紹介者 → ①に同じ+10人以上紹介者には橋之介グッズ1式
新・再入会友 → 橋之介マスコット
- ④ 紹介者 → 新入会友1人につきQUOカード500円分1枚(上限1万円)
新・再入会友 → QUOカード500円分

※ 2007年・2008年は再入会者も対象

告知方法：

連盟会報とウェブサイトにお知らせを掲載するほか、紹介カードと入会案内をブリッジセンター及びクラブに配布し、設置を要請して周知徹底をはかっている。

3) 継続10年プラスありがとうキャンペーン

応募期間：2006年3月1日～3月31日(会報2006年1・2月号及びウェブサイト掲載)

賞品：① 2006年11月ACBLハワイナショナルにペアで招待(抽選で3人)、
② ACBLで使用できる金券100ドル分(残念賞として10人)

4) キャンペーン関連経費

キャンペーン名	内訳	金額
1) テディベア名称募集	①テディベアカード(82人)	¥17,000
	②50周年記念カード(10人)	¥43,000
	③ソウル旅行招待(6人分)	¥484,000
	国内旅行券(4人分)	¥200,000
2) 新入会友紹介	2005年(77人の会友が135人を紹介)	¥207,000
	2006年(73人の会友が126人を紹介)	¥266,000
	2007年(70人の会友が134人を紹介)	¥228,000
	2008年(65人の会友が123人を紹介)	¥95,760
3) 継続10周年ありがとう	①ハワイ旅行招待(3ペア 6人)	¥852,000
	②ACBL金券(10人)	¥118,000
合計		¥2,510,760

② ブリッジの今後の発展のための普及活動の活性化

(a) 若年層をターゲットとする普及活動(普及事業部ユース部会)

(資料 17) 若年層に対する普及活動に関する詳細

1) ユース支援小部会

現役ユース会友に対する支援を担当する小部会として 2005 年に新設。主な活動内容と成果は次のとおり。

- 大学クラブ新入部員勧誘活動や学生リーグ合宿に対する支援の継続（従来からの活動を継続）
2005 年度には現役学生ゼロで廃部寸前であった東京大学ブリッジ部が 2007 年度には現役学生 3 人となり復活した。
- 国際大会へのユースプレイヤーの派遣
2006 年以降は W B F が「スクール」部門(年齢制限 21 歳以下)を新設したことに伴い、「ユース」と「スクール」の 2 部門にチームを派遣。2007 年には、P A B F 大会の「スクールズ」部門の代表として J C B L 史上初めて高校生 2 人が選出された。
- ユースナショナルチームの強化プログラムの実施
2004 年度より寺本ユース担当理事のもとで強化プログラムを実施、2005 年度 P A B F 大会ユース部門では日本代表が初優勝を果たし、早々に成果が現れた格好となった。2007 年度からは講師陣を 2 人増員。
- その他、要請に応じて学生プレイヤーを支援
都内私立高校にブリッジ同好会がブリッジに関心と理解のある先生方(複数)を顧問に発足

2) B I S (Bridge in School : 学校教育を通じたブリッジ普及活動)小部会

学校教育の中にブリッジを採り入れてもらうことによって、若年層にブリッジを普及する活動を行うために 2005 年に新設。主な活動内容と成果は次のとおり。

- 慶應義塾普通部(中学校)ブリッジ講座
2005 年度より正規の授業として週 1 回 2 時限・通年でブリッジ講座が採用され、講師・アシスタントを派遣。2007 年度末までの延べ受講者数は 126 人。
残念ながら文部科学省による「ゆとり教育」の見直しにより、学校側が大幅に授業編成を変更したことに伴い、2007 年度末で終了。
- 東京大学教養学部全学体験ゼミナール「考える力を養う コントラクトブリッジ」講座
2006 年度より教養課程の正規講座として採用。同大学教授のロバート・ゲラー理事が講師を担当。2007 年度末までの延べ受講者数は 106 人。
- 成蹊小学校デモンストレーション授業
2006 年 3 月に 3 学年(1 年・2 年・6 年)に 2 時間ずつのデモンストレーション授業を行った。受講者数は合計 71 人。
- 慶應義塾幼稚舎(小学校)ブリッジ講座
2007 年度 1 学期より、4 年生 1 クラスで正規授業として週 1 回 1 時限でブリッジ講座が採用され、講師・アシスタントを派遣。当初は 1 学期限定の予定であったが、好評につき 3 学期まで継続。受講者数は 36 人。
- 教材製作
各講座の受講者のレベルに合わせ、担当講師が中心となって教材を制作。将来的に汎用性のある教材にまとめていく予定。

(資料 17 続き) 若年層に対する普及活動に関する詳細

3) ジュニアくらぶ小部会

上記の 2 大活動とは別に、2005 年の夏休み期間中のテストケースを経て、2006 年 2 月にジュニア層が継続してブリッジを楽しめる場を継続的に提供することによって将来のブリッジ人口増加につなげることを目指し「ジュニアくらぶ」を新設、個別プロジェクトとして立ち上げ、2006 年度に小部会に格上げした(活動の活発化を受けて、2008 年度より部会にさらに格上げ)。主な活動内容と成果は次のとおり。

- ジュニアくらぶの運営
ジュニアのためのブリッジクラブ。ジュニアのブリッジに対する関心持続を狙って、会員を対象にスタンプを集めると景品がもらえるスタンプラリーを実施。会員数は 2007 年度末時点で 165 人で、何度もイベントに参加するヘビーリピーターが育ってきている。
 - ジュニア・ブリッジサロン
春・夏・冬の学校が休みとなる期間を中心に、横浜、四谷、京葉の 3 ブリッジセンターで不定期開催。2007 年度末までの延べ開催回数 21 回、延べ参加者数 198 人。
 - ミニブリッジ大会「ハシノスケ杯」
2006 年度夏休みに初めて開催、以後数回は不定期に開催してきたが、「大会」として位置づけを明確にし、大会としてステータスを上げるため、2008 年度以降は N E C ブリッジフェスティバル開催時、夏休み中、年末の年 3 回開催にすることに決定。5 ヶ年計画期間中に 6 回開催。
 - 橋之介ミニ道場／ひろば(四谷 B C)
2006 年度よりゲーム形式の練習会「道場」を開設、ほぼ月 1 ペースで開催、年度末などの節目には「スペシャル大会」も開催。
ジュニアを含むグループでの参加が条件の体験教室「ひろば」は、ジュニアとブリッジを楽しみたい会員・会友のニーズに応える形で 2006 年度末より試験的に開始、2007 年度から「道場」開催日の午前中に定期開催。2007 年度末までの延べ開催回数 22 回(道場;スペシャル大会を含む)/7 回(ひろば)、延べ参加者数 301 人(道場・ひろば・スペシャル大会合計;ジュニアのみの数字)。
 - 夏休みジュニア・ブリッジキャンプ
2007 年度に試験的に開始。参加者に好評だったことから、2008 年度以降毎年開催予定。
 - その他
N E C ブリッジフェスティバル体験教室もジュニアくらぶスタンプラリーの対象イベントに指定、その他、ジュニア関連のイベントへの協賛・協力
- ※ ジュニア関連イベント開催に当たっては、四谷 B C、横浜 B C、京葉 B C より会場を無償または格安でご提供いただいている。

(資料18) ユース・ジュニア関連経費(2005～2007年度)

① ユース支援小部会関連経費

年度	主な項目・内訳	金額	
2005年度	・大学クラブ新入部員勧誘活動助成	¥119,000	
	・学生リーグ合宿(夏/春)助成 講師/アシスタント謝礼、新人学生/遠距離者への交通費/宿泊費助成	¥492,000	
	・ユース強化プログラム助成 代表選手の強化試合参加料助成、強化練習会/代表選考試合/直前練習会などへの交通・宿泊費助成、講師/アシスタント謝礼	¥780,000	
	・国際試合へのユースチーム代表派遣 NPC/選手6人 計7人	・第43回PABFソウル大会	¥1,882,000
		・世界ユースチーム選手権(シドニー)	¥964,000
	・国際試合への参加助成	・香港インターシティ(6人)	¥300,000
		¥4,537,000	
2006年度	・大学クラブ新入部員勧誘活動助成	¥146,000	
	・学生リーグ合宿(夏/春)助成 講師/アシスタント謝礼、新人学生/遠距離者への交通費/宿泊費助成	¥238,000	
	・ユース強化プログラム助成 代表選手の強化試合参加料助成、強化練習会/代表選考試合/直前練習会などへの交通・宿泊費助成、講師/アシスタント謝礼	¥856,000	
	・国際試合へのユースチーム代表派遣 NPC/選手5人 計6人	・第44回PABFバンコク大会	¥662,000
		・世界ユースチーム選手権(バンコク)	¥1,145,000
		・世界大学選手権(天津)	¥1,021,000
	・国際試合への参加助成	・PABFバンコク大会 スクールチーム5人参加助成	¥250,000
小計		¥4,318,000	
2007年度	・大学クラブ新入部員勧誘活動助成	¥40,000	
	・学生リーグ合宿(夏)助成	¥10,000	
	・ユース強化プログラム助成	¥873,000	
	・国際試合への代表派遣	・第45回PABFバンドン大会 ユースとスクールの2チーム(12人)	¥2,880,000
小計		¥3,803,000	
期間中合計		¥12,658,000	

(注) ユース支援部会発足以降の2005年度以降のデータ。

(資料18 続き) ユース・ジュニア関連経費(2005~2007年度)

② B I S 小部会 — 学校ブリッジ講座関連経費

年度	主な項目・内訳	金額
2005年度	<ul style="list-style-type: none"> ・慶應義塾普通部(中学校)ブリッジ授業 (2クラス/69人;週1回2時間授業/通年) 開始に当たりテキスト・副教材作成費/備品/講師2人/アシスタント3人派遣 ・成蹊学園小学校1年生/2年生/6年生へのミニブリッジ紹介授業 ・首都圏の8校に対する開拓活動 	¥1,337,000
2006年度	<ul style="list-style-type: none"> ・慶應義塾普通部ブリッジ授業 (1クラス/31人;週1回2時間授業/通年) テキスト改訂・副教材作成費/備品/講師2人/アシスタント1人派遣 ・東京大学教養学部全学体験ゼミナール (夏学期13回授業、冬学期13回授業 受講生計64人) テキスト製作費/アシスタント2人派遣/備品など ・学校関連開拓活動 	¥1,700,000
2007年度	<ul style="list-style-type: none"> ・慶應義塾普通部(中学校)ブリッジ授業 (1クラス/26人;週1回2時間授業/通年) テキスト改訂・副教材作成費/備品/講師2人/アシスタント1人派遣 ・東京大学教養学部全学体験ゼミナール (夏学期13回授業、冬学期13回授業 受講生計42人) テキスト製作費/アシスタント2人派遣/備品など ・慶應義塾幼稚舎(小学校)ミニブリッジ授業 (4年生36人、週1時間、通年) ・PTA主催プログラム(学童保育を含む)での体験教室支援、小・中学校教 校に対するブリッジ紹介活動など 	¥1,415,000
期間中合計		¥4,452,000

③ ジュニア小部会—ジュニアくらぶ活動関連経費

年度	主な項目・内訳	金額
2005年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「ジュニア・ブリッジサロン」開催—7回 (夏休み3回、NECブリッジフェスティバル、春休み3回) ※ 春休みの「サロン」からスタンプラリー開始 	¥142,000
2006年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「ジュニア・ブリッジサロン」などスタンプラリー対象イベント開催—14回 ・「ハシノスケ杯」—3回 ・「橋之介ミニ道場」—8回 ・JCB L会報/ウェブサイトへのイベント案内掲載 ・スタンプラリー景品代 	¥417,000
2007年度	<ul style="list-style-type: none"> ・「ジュニア・ブリッジサロン」などスタンプラリー対象イベント開催—16回 ・「ハシノスケ杯」—3回 ・「橋之介ミニ道場(ミニひろば/プレ道場)」—14回 ・JCB L会報/ウェブサイトへの案内/活動報告の掲載 ・スタンプラリー景品代 	¥1,240,000
期間中合計		¥1,799,000

(資料19) ユース・ジュニア会友数の推移(2003～2007年度実績)

(単位：人)

会員・会友数	新入会	(うち ジュニア)	再入会	ユース資格 喪失者数*	未更新者数	年度末会友数
2002年度(参考)	9	2	0	0	3	53
2003年度	17	0	0	5	8	57
2004年度	14	0	1	8	14	50
2005年度	30	7	0	5	9	66
2006年度	75	58	0	2	17	122
2007年度	29	17	0	3	13	138
5年間累計	165	82	1	23	61	

(注) * ユース資格喪失者は、26歳を超えてユース会友資格を失った会友数。

[傾向と検証]

- 年度末時点でのユース・ジュニア会友数は2002年度の53人から、2007年度には138人に増加、5ヶ年計画期間中で85人の純増。特にジュニア会友が大幅に増加したことが大きな特徴である。
- 新入会と再入会で1年に平均33人が増加する一方、毎年平均12人が未更新(退会)、資格喪失者は年平均4人強となっており、年平均実質増加数は約17人。
- 退会者及び資格喪失者が出なかった場合の2008年3月時点での会友数は219人(計算方法)
 - ① 5ヶ年計画開始時点(2002年度末)のユース・ジュニア会友数=53人①
 - ② 2008年(3月末時点)のユース・ジュニア会友数=138人(対開始時：+85人)
 - ③ 期間中のユース・ジュニア新入会者数と再入会者数の合計
=新入会者165人+再入会者1人=166人(年平均：約33人)②
 - ④ 期間中(2003年度～2007年度)の未更新者(退会者)数とユース資格喪失者の合計
=未更新者61人+資格喪失者23人=84人(年平均：約16人)
 - ⑤ 退会者及び資格喪失者が出なかった場合の2008年3月時点での会友数
=①+②=219人

(資料20) ジュニアくらぶ会員数の推移(2005～2007年度)

(単位：人)

年度	新規入会	資格喪失	退会	年度末会員数	会友登録者数 (累計)
2005年度*	24	n/a	n/a	24	12
2006年度	65	2	0	87	57
2007年度	80	0	2	165	69
合計	169	2	2	n/a	n/a

(注) * ジュニアくらぶは2006年2月のNECブリッジフェスティバル開催時に発足したため、同年度の入会者数は少ない。

(b) 地方への普及の活性化(普及事業部)

(資料 2 1) 地方における包括的普及戦略

<p>地方における普及活性化のための包括的システム</p> <p>(1) 広報活動(事前)</p> <p>(2) 魅力あるブリッジ環境の提示、続けたいと思わせる体験指導</p> <p>(3) イベントが終了後も体験者が定期的に学び、プレイできる場(クラブ、カルチャースクール講座の開拓など)の確立(事後)</p> <p>2005 年度より、上記 3 点を軸とする普及活動を本格的に展開</p>

(資料 2 2) 地方における普及活動実績 (2003~2007 年度)

年度 (開催月)	開催地	イベント	内容
2003 年度 (10 月)	山形市	「第 18 回国民文化祭やまがた 2003」 出展	体験教室参加者：約 1,000 人 事前・事後に計 8 回の体験教室を開催、地元へのブリッジ知名度の浸透を図った。
(11 月)	那覇市	「第 15 回全国生涯学習フェスティバルまなびピア 沖縄 2003」 出展	体験教室参加者：約 150 人 事後、有志による定期練習会、インターネットを活用した練習会(東京で普及部会員が指導)が スタート。
2004 年度 (11 月)	北九州市	「第 19 回国民文化祭ふくおか 2004」 出展	事前・事後に計 2 回の体験教室を福岡市で開催。終了後、福岡市西日本天神文化センターにて 初心者講座が開講、以後順調に中級者講座に進み、後の連盟九州支部/福岡ブリッジプラザ設立 (2007 年度) の礎となった。福岡県の会員・会友数は 2002 年度末の 44 人から現在 71 人に増加。
(10 月)	松山市	「第 16 回全国生涯学習フェスティバルまなびピア 愛媛 2004」 出展	体験教室参加者：123 人 終了後の受け皿として愛媛社会保険センターでブリッジ講座開講、現在も順調にクールを重ね ている。会員・会友数は 2002 年度末の 17 人から現在 22 人に増加。

(資料22 続き) 地方における普及活動実績 (2003~2007年度)

年度 (開催月)	開催地	イベント	内容
(10月)	福井市	「第20回国民文化祭ふくい2005のプレ文化祭」 出展	当時、会員数ゼロだった福井県で翌年開催される国民文化祭参加を成功させる足がかりをつけるため、地元プレイヤー(当時は非会友)の協力のもと、プレ文化祭に出展した。終了後、当該プレイヤーの熱意ある普及活動により福井県生涯学習センターでの講座開講(翌年6月)、2006年8月には福井コントラクトブリッジクラブ(福井CBC)設立へと発展した。
(4月)	高松市	「第1回瀬戸内海ブリッジフェスタ」助成 *2004年2月に開催なので2003年度	瀬戸内海周辺地域でのブリッジ活性化の支援を目的に、大阪BCが主催した第1回瀬戸内海ブリッジフェスタ開催を助成した。四国新聞への広告掲載は記事掲載につながった。これを機に同好会だった高松BCは公認クラブとなり、翌年以降の「瀬戸内海ブリッジフェスタ」は高松BC主催で行なわれるようになった。
2005年度 (4月)	高松市	「第2回瀬戸内海ブリッジフェスタ(第1回香川県知事杯)」助成・体験教室	体験教室参加者:42人 高松BC初主催となる同競技会を側面支援するため、事前に県知事の表敬訪問とカルチャーセンター・メディアへのアプローチを実施。終了後、高松初のブリッジ講座が開講。広報面では、事前に四国新聞に告知広告掲出、当日以降、四国新聞本紙に計2回記事としてとりあげられた。
(10月)	広島市	「第1回広島リジョナル」体験教室	体験教室参加者:20人 直前に中国新聞文化センターにて入門講座開講。広報面では、中国新聞本紙でのブリッジ紹介記事、リビングひろしまでの告知広告掲載。広島BCの協力で全メディアにアプローチした結果、中国放送・テレビ広島でニュース放映された。中国新聞文化センターへの受講希望者以外の体験教室参加者のフォローは、地元会友が喫茶店に場所を確保して練習会の形で実施中。
(10月)	福井市	「第20回国民文化祭ふくい2005」出展	体験教室参加者:1160人(一般参加者:210人、学校動員生徒:950人) 前年のプレ国文祭参加を機に地元プレイヤー1名の熱意で設立された福井CBCが普及活動の基盤となった。福井新聞での読者参加型記事広告(5回)、福井放送/NHK福井による福井CBC紹介などの広報活動は期間中連日の大入り満員、終了後の生涯学習センター講座の継続、福井CBCの会員増加(現在22名。週1回4テーブルでプレイ中)へと大きくつながった。

(3月)	福岡市	「九州リジョナル」体験教室	体験教室参加者：34人 事前に情報誌での告知広告、西日本新聞での紹介記事で盛り上がった結果、当日の様子はテレビニュース放映のほか、再度西日本新聞で記事掲載された。この時を機に教育委員会関係者から教育現場へのブリッジ導入に関する助言を受けたこと、またカルチャー講座受講者有志から常設で楽しめる場所への要望が高まり、2007年度の九州支部開設の動きへとつながった。
(3月)	高松市	「第3回（3月）瀬戸内海ブリッジフェスタ」 助成・体験教室併催	体験教室参加者：28人 会場の関係で同一事業年度内に2回の開催となったが、「瀬戸内海」エリア（広島、大阪、岡山）のブリッジ活性化のため引き続き支援を行った。告知広告を四国新聞オアシスに掲載。四国新聞本紙での事前掲載が実現したほか、当日はテレビ局1社、四国新聞(再取材)、サンケイ新聞が取材に訪れるなど、高松での認知度向上の一翼を担った。
2006年度 (6月)	札幌	「北海道リジョナル」体験教室	体験教室参加者：23人 道内におけるブリッジの認知度向上をめざし、事前に北海道新聞文化センターでの講座開講を働きかけたほか、北海道日刊スポーツにブリッジおよび直前にオープンした道内初の常設会場「アウ・クル」をPRする記事広告を掲出。北海道新聞での告知記事のほか、当日の様子は3紙に記事掲載された。また連盟事務局顧問が室蘭市長を表敬訪問、ブリッジ普及を呼びかけた。
(8月)	大阪	「第1回関西ジュニアペア碁大会」ミニブリッジ 1日体験講座	体験講座参加者：100人 IMS A（国際マインドスポーツ協会）仲間の囲碁（日本ペア碁協会）が主催するイベントにてジュニア棋士たちにミニブリッジを紹介。
(10月)	ひたちなか市	「第16回全国生涯学習フェスティバルまなびピア いばらき2006」出展	体験教室参加者：約400人 茨城新聞に5回シリーズのミニ広告、NHKデジタル番組への出演などで事前PRを行なった。5日間開催予定のところ台風被害のため急遽3日間に短縮され、会場スペースも縮小という事態にみまわれた。まなびピアの受け皿とすべく、同年2月に開講した土浦市のカルチャーセンターで講座が開講したほか、まなびピア後に水戸市近郊でも1講座開講した。
(10月)	広島	「第2回広島ブリッジフェスタ」体験教室	体験教室参加者：23人 中国新聞、リビング広島で事前告知し、中国新聞で直前に記事掲載があった結果、昨年と同数の参加者を得た。広島BCでフォロー中。

(10月)	さくら (栃木県)	「ゆめ! さくら博」体験コーナー	体験コーナー参加者：40人 栃木県さくら市が主催する生涯学習の展示・体験イベントに出展を計画した同市在住の会友からの相談を受けて、支援実施。出展の過程で同市教育部門関係者の間でブリッジへの理解を得ることができ、2007年9月からは同市の学童保育活動「ふれあいスクール」の科目のひとつとして採用されている。
(10月)	長崎	「ながさき国際協力・交流フェスティバル」 体験コーナー	体験教室参加者：30人 長崎市チェスクラブの紹介により長崎県国際交流協会主催、JICA九州共催、外務省/長崎県/長崎市などが後援した同イベントに、長崎コントラクトブリッジ研究会を支援する形で参加。長崎でブリッジを一般に広く紹介する初めての機会となり、同研究会に多くの初心者が集まるようになった。
(11月)	山口	「第21回国民文化祭やまぐち2006」出展	体験教室参加者：約1000人 県の会友数3名という状況の中、福岡/広島各BCの応援を得て10日間参加。日刊スポーツへの記事広告、山口テレビ出演をはじめ地元メディア4紙で記事掲載されたこともあり、会場は連日大入り満員で終始した。終了後は山口市と下関のプレイヤーによる定期的な練習会がスタート、福岡ブリッジプラザの試合にチームを組んで参加など、同地域の活性化につながった。
(2月)	福岡	ミニブリッジナイト	参加者：48人 情報誌アヴァンティと共催した福岡の30代前後の男女を対象にした夜の体験教室。同誌でブリッジPRを兼ねて参加者を募集したところ、定員40人に対し70人を超える応募があり先着順で決定した。福岡でブリッジが若い社会人層にも受け入れられるとの感触を得た初の試み。
(3月)	福岡	「第1回西日本新聞社杯・九州リジョナル」 体験教室	体験教室参加者：90名 九州支部・福岡ブリッジプラザ設立後初めてのリジョナルで初の西日本新聞社杯であったことから西日本新聞で事前告知(社告を含む)を含み大々的にとりあげられたほか、2つのテレビ局でニュース放映された。参加者には福岡ブリッジプラザ/西日本天神文化サークル共催の4月スタート入門講習会を案内して、受講者増加につながった。
(1月～3月)	福岡	福岡ブリッジプラザオープン記念体験教室	体験教室参加者：196人 福岡ブリッジプラザオープンを記念し、同プラザが利用可能になった1月末から3月末までの2ヶ月間に計11回の体験教室を行ない、3月/4月開講の入門講習会受講生確保につなげた。

2007年度 (4月)	高松	「第4回瀬戸内海ブリッジフェスタ・香川県知事杯」体験教室	体験教室参加者：10人 体験教室参加者2人が地方会友／ジュニア会友に登録。広報面では四国新聞オアシスにて事前告知、当日の様子は四国放送(テレビ)のニュースのほか、翌日の四国新聞朝刊に掲載された。
(4月)	福岡	「福岡お茶ノ水医療福祉秘書専門学校」ブリッジ体験講座	講座参加者：22人 福祉担当教諭の依頼により、福祉の現場で活用できるツールのひとつとしてミニブリッジを児童福祉科3年生16人、福祉カウンセラー科4人、教員2人に紹介した。
(5月)	福岡	「九州大学(伊都キャンパス)」体験教室	体験教室参加者：22人 工学部学生/大学院生22人を対象に開催。その様子は翌日の西日本新聞コラムで紹介された。
(5月)	仙台	「仙台青葉祭りリジョナル」体験教室	体験教室参加者：10人 常設会場があり、東北大学ブリッジ部学生たちの育成・支援にも熱心に取り組んでいる仙台BCの普及活動をサポートするため、仙台で本格的なブリッジPR活動を開始。地元会友と全メディアを回った結果、河北新報に東北大学の学生がユース日本代表に選ばれたことが地元の誇りとして大きく掲載され、数ヵ月後のカルチャーセンターからの開講依頼につながった。
(6月)	札幌	「北海道リジョナル」体験教室	体験教室参加者：約100人 プレゼント付きの告知広告を北海道新聞と系列2紙に出したところ、全道から350人超の応募があり、体験教室も大入り満員、北海道放送でニュース放映された。夏直前だったためかカルチャーセンターの受講者増加には至らなかったが、アウ・クルで行なった個別対応式のフォロー活動はその後の「アウ・クル入門講習会」の定期開催へと発展した。
(6月)	バンドン	「バンドン日本人学校」ブリッジ体験教室	体験教室参加者：16人 PABF選手権参加のため訪れたインドネシア、バンドン市の日本人学校で開催。小学1年～中学1年の児童11人、保護者、先生を対象にミニブリッジを紹介。ミニブリッジが盛んな同国の小学校との交流ツールに役立ててほしいと、現地で直接コンタクトして実現した初めてのケース。
(6月)	ジャカルタ	「ジャカルタ・ジャパンプラブ・ブリッジ部」体験教室	体験教室参加者：36人 PABFバンドン大会参加の帰途、ジャカルタ・ジャパンプラブ・ブリッジ部とともに在留邦人へのブリッジ普及を図るために開催。海外ブリッジクラブと初めての本格的交流イベントが実現した。

(7月)	北九州	「北九州市立江川小学校夏の学校」体験教室	体験教室参加者：32人 GWに掲出した朝日新聞記事広告がきっかけで同校関係者から「算数の力をつけるのに良いのでは」との問い合わせをいただいたことから実現した。
(8月)	浜松	「浜松リジョナル(志村杯・文部科学大臣杯決勝)」体験教室	体験教室参加者数：10人 浜松で文部科学大臣杯が開催されていることを県内にアピールすることを第一の目的に、地元メディア全社を訪ねてリリース・ブリッジ資料を直接渡す広報活動を展開。中日ショッパー、リビング浜松で最初の露出を図った。試合結果は静岡新聞、中日新聞に掲載された。
(8月)	大阪	「第2回関西ジュニアペア碁大会」ミニブリッジ1日体験講座／ミニジョイントゲーム大会(2種競技)	参加者数：約100人 昨年に引き続き、囲碁のジュニアイベントにゲスト団体として参加した。午後は、ミニブリッジとペア碁をセットにしたミニジョイントゲーム大会を企画・実施し、ペア・ゲーム2種の合計点で競うというユニークな試みは、子どもたちだけでなく囲碁関係者からも好評を得た。
(8月・9月)	福岡県	「わくわく体験教室」(糸島郡二丈町)	体験教室：1回目－8月50人/2回目－9月20人 西日本新聞に掲載された九州大学体験講座の記事がきっかけとなり、二丈町町会議員の方からの依頼で同町の小・中学生・保護者を対象に公民館で2回開催。
(9月)	仙台	「せんだい2007地球フェスタ」体験教室	体験教室参加者：90人 仙台市民が多数集まる国際交流協会主催イベントに出展した仙台BCをサポート。
(10月)	仙台	「第20回河北新報社杯・仙台リジョナル」体験教室	体験教室参加者：12人 東北大学学生を同大学ブリッジ部に、ラバーブリッジプレイヤーを仙台BCへ引き合わせた。
(10月)	広島	「第3回ひろしまブリッジフェスタ」体験教室	体験教室参加者：22人 福岡の普及協力員2人に応援を依頼して体験教室を開催。広島BCにフォローを依頼した。
(10月)	長崎	「ながさき国際協力・交流フェスティバル」体験コーナー	体験コーナー参加者：55名 昨年に続きチェスとともに参加。長崎新聞にコンタクトし、同市で初めてブリッジの記事が掲載された。事後、チェスクラブとの定期的なミニブリッジ交流が行なわれるようになったほか、首都圏以外で初めてのジュニアクラブ活動がスタートした。

(10月)	徳島	「第22回国民文化祭とくしま2007」出展・体験教室	<p>体験教室参加者：約700人</p> <p>同市出身の会友による地元社会への働きかけ、告知広告掲出、そして徳島新聞の社会面に2日連続で大きくブリッジ紹介記事が掲載されたことなどで、会場は連日大入り満員。高松、愛媛、大阪、長崎、広島、神奈川から20人を越える会友の協力で大成功に終了、高松の会友が通いでフォローを実施中。同県の会員数は国文祭前の3人から6人に増加した。</p>
(3月)	福岡	「第2回西日本新聞社杯・九州リジョナル」体験教室	<p>体験教室参加者：28人</p> <p>福岡ブリッジプラザの4月開講入門講習会につなげることを目的に実施。</p>

(資料 2 3) 地域別会員・会友数の推移(2003～2007 年度：年度末ベース)

年度	首都圏			首都圏以外			全体
	会員・会友数 (人)	前年比 増減	構成比	会員・会友数 (人)	前年比 増減	構成比	会員・会友数 (人)
2002 年度(参)	5,195	n/a	77.2%	1,533	n/a	22.8%	6,728
2003 年度	5,263	68	77.9%	1,497	-36	22.1%	6,760
2004 年度	5,351	88	78.1%	1,501	4	21.9%	6,852
2005 年度	5,405	54	78.3%	1,496	-5	21.7%	6,901
2006 年度	5,574	169	79.1%	1,477	-19	20.9%	7,051
2007 年度	5,673	99	79.0%	1,510	+33	21.0%	7,183
期間中増減		478			-23		455

(注) 首都圏は東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県の1都3県

[傾向と検証]

1. 5ヶ年計画開始時点から全会員・会友数は6,728人から約1.07倍に相当する7,183人となり、全体で455人、年平均では91人増加した。
2. 首都圏の会員・会友数は順調に伸びており、5ヶ年計画開始時点の5,195人から478人増の5,673人へ増加するとともに、会員数全体に対する割合は77.2%から79.0%へ拡大した。一方、地方の会員数は、2007年度にやや盛り返したものの全般的に低迷傾向にあり、期間中全体では本計画開始時の1,533人から23人減の1,510人に減少、中間報告時点で修正した目標数値1,600人を大幅に下回った。
3. 期間中、首都圏では年平均で95.6人増加する一方、それ以外の地方では同4.6人の減少となった。その一因として、首都圏とそれ以外の地方では圧倒的に既存プレイヤー数に差があることに加え、ブリッジセンターをはじめとする常設会場が首都圏に集中していることや、地方ではカルチャースクールなど気軽にブリッジを習うことのできる環境が整っておらず、プレイヤーをとりまく環境がそもそも大きく異なる点が挙げられる。こうした環境の違いを反映して競技会開催地域も首都圏に集中しているため、必然的に競技会への参加機会が限られてしまう地方在住プレイヤーにとっては連盟の会員・会友になるメリットが相対的に小さいと考えられる。さらに、転勤などによる既存会員・会友の地方から首都圏への移動も、地方における会員数の減少傾向に関連している可能性がある。
4. こうした中、2007年度は地方在住の会員・会友数がようやく再び増加に転じた。これは2004年度と同様に一時的なものなのか、あるいはこれまでの普及活動の成果が会員・会友数として徐々に現れ始めたものなのかは、今後数年間の傾向を見ながら見極めていく必要がある。いずれにせよ、首都圏以外の地方が連盟の普及活動のターゲットとして開拓余地が十分にある有望地域であることに変わりはない。今後も、これまで培ってきた普及ノウハウをさらに改善しつつ、より効率的・効果的に普及活動を展開して、地方における会員・会友数の増加傾向を持続できるよう努力していく必要がある。

(資料24) 5ヶ年計画期間中の都道府県別会員・会友数増減

1. 増加

(単位：人)

増加した都道府県	増加数	現会友数	(新入会者)
1) 東京都	207	2,990	544
2) 神奈川県	181	1,929	397
3) 千葉県	55	484	146
4) 埼玉県	35	270	62
5) 福岡県*	27	71	12
6) 兵庫県	20	260	66
7) 北海道*	12	52	6
8) 栃木県	10	36	10
9) 宮城県*	7	79	32
9) 岩手県	7	18	8
9) 香川県*	7	14	5
12) 愛媛県*	6	22	9
13) 広島県*	5	36	12
14) 福井県*	4	4	5
14) 徳島県*	4	6	0
16) 群馬県	3	8	4
16) 山口県*	3	5	2
18) 京都府	2	32	11
18) 岡山県	2	6	2
18) 島根県	2	2	0
21) 新潟県	1	4	1
21) 山梨県	1	3	1
21) 鹿児島県	1	1	1
計 23 都道府県で増加	602	6,332	1,336
*首都圏	478	5673	1149
(構成比)	79.4%	89.6%	86.0%
*首都圏以外の 19 県	124	659	187
(構成比)	20.6%	10.4%	14.0%

(注) 1. 2002 年度末と 2007 年度末の比較。2003 年度以降、各年度で増減を経たうえでの最終数値。

2. 首都圏は東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県の 1 都 3 県。

3. *印は、国民文化祭/まなびピア出展地域またはリジョナル大会開催時に体験教室などの普及活動を実施した地域。

- 5ヶ年計画期間中に会員・会友数が増加した都道府県数は合計 23、合わせて 602 人が増加(年平均 120.4 人)。

2. 減少

(単位：人)

減少した府県	減少数	現会友数	(新入会者)
1) 茨城県	-15	73	0
2) 大阪府	-11	160	50
3) 富山県	-9	18	1
4) 静岡県*	-8	146	25
5) 岐阜県	-7	26	2
6) 熊本県	-6	8	0
7) 奈良県	-4	15	3
8) 愛知県	-3	132	28
9) 三重県	-2	7	0
9) 大分県	-2	1	0
9) 宮崎県	-2	0	0
9) 沖縄県*	-2	1	0
13) 滋賀県	-1	8	3
13) 秋田県	-1	2	0
13) 長野県	-1	7	1
13) 長崎県	-1	16	2
計 16 府県で減少	-75	620	115

(注) 1. 2002 年度末と 2007 年度末の比較。2003 年度以降、各年度で増減を経たうえの最終数値。

2. *印は、国民文化祭/まなびピア出展地域またはリジョナル大会開催時に体験教室などの普及活動を実施した地域。

- 期間中会員・会友数が減少した府県は計 16。会員数は計 75 人減少(年平均 15 人)。
- 既存会員数が 100 人を超える大阪府、静岡県、愛知県での減少傾向が懸念材料。

3. 増減なしの県

(単位：人)

増減なしの県	増減	現会友数	(新入会者)
1) 青森県	0	3	0
2) 山形県*	0	1	0
3) 福島県	0	4	1
4) 和歌山県	0	4	0
5) 鳥取県	0	2	0
6) 高知県	0	0	0
7) 佐賀県	0	0	0
8) 石川県	0	33	0
計 8 県で変動なし	0	47	1

(注) 1. 2002 年度末と 2007 年度末の比較。2003 年度以降、各年度で増減を経たうえでの最終数値。

2. *印は、国民文化祭/まなびピア出展地域またはリジョナル大会開催時に体験教室等の普及活動を実施した地域。

- 8 県で期間中の会員・会友数の増減なし。

[傾向と検証]

1. 期間中、全体の約半数に当たる 23 都道府県で会員・会友数が合計 602 人増加した。このうち 79% に当たる 478 人は首都圏で会員登録、首都圏以外で増加したのは 19 道府県。減少したのは 16 道府県で、合わせて 75 人の減少。会員数が増減なしにとどまった県は 8 県、このうち会員数ゼロの県は、鳥取県、高知県、佐賀県、宮崎県の 4 県となった。5 ヶ年計画開始時にゼロだった鹿児島県は 2007 年度に 1 人入会、本計画開始時の会員数が 2 人だった宮崎県では 2003 年度に 2 人とも退会、会員数ゼロ県に加わった。
2. 会員・会友が増加した 23 都道府県のうち増加数のトップ 5 は、上から順に、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、福岡県であった。2006 年度に常設会場がオープンした福岡県は、大阪と並び関西地区の中心である兵庫県を上回った。同様に、常設会場がオープンした北海道が 7 位、移転により常設会場の収容能力が拡大した宮城県が 9 位と、常設会場を確保している地方が上位につけている。また、首都圏以外で会員・会友の増加数が多いのは、国民文化祭／まなびピアの出展地域もしくはリジョナル大会開催時などに連盟主導で普及活動を実施した地域に集中しており、普及活動の成果が明白に現われたと言えよう。これらの地域の多くでは、JCBL には未入会だが定期的にブリッジを楽しむようになった初心者プレイヤーも着実に育ちつつある。
3. 一方、会員が減少した 16 道府県のトップ 5 は、減少数の多い順に茨城県、大阪府、富山県、静岡県、岐阜県であった。既存会員数が 100 人を超える大阪府、静岡県、愛知県での減少は、懸念材料である。
4. 会員数が減少した地域では、未更新者(一度は会員・会友になったが更新をしない人)の数が新入会者+再入会者の数を必ず上回っている。一方、会員が増加した 23 都道府県では新入会者+再入会者数が未更新者を上回っている。従って、会員・会友の減少を防ぐために、更新手続きや会費の納入方法の改善など、未更新者を減少させる工夫も必要かもしれない。